

## サティの作品

3曲からなる《ジムノペディ》は、1888年の作。サティは22歳、パリのモンマルトルに住み始めた頃である。タイトルは古代ギリシャの祭典「ジムノペディア」から採られており、その祭が描かれた壺を見て着想を得たという。3曲とも遅いテンポの3拍子で、独特のアンニュイな旋律が不思議な感覚をもたらす。第1番はサティのなかでも最も有名な曲で、ドビュッシーは第1番と第3番を管弦楽版に編曲している。

6曲ある《グノシエンヌ》のうち、1890年に作曲された第1番から第3番までが「3つのグノシエンヌ」として知られ、第4番以降の3曲はサティの死後に発見され、1968年に出版された。「3つのグノシエンヌ」は、東洋的なエキゾチシズムが濃厚に香るが、それは1889年にパリの万国博覧会で東洋文化に触れたことがきっかけと言われている。タイトルは古代ギリシャの古都、あるいはグノーシス派に由来すると考えられているが定かではない。

《ヴェクサシオン》は、52拍からなる(1分ほどの)短いフレーズを840回繰り返す作品で、指示通り演奏すると世界一長いピアノ曲となる。正確な作曲年代は定かではないが、1895年頃とされる。テンポの指定がないため全曲の演奏時間にはかなり幅があるが、聴くほうも弾くほうも体力と覚悟が必要。ジョン・ケージらによって行なわれた1963年の初演では、複数の奏者が交代で演奏した。今回はもちろん全曲ではなく、さわりのみをお届けする。

《星たちの息子》は、フランスの神秘主義者・作家ジョセファン・ペラダンによる神秘劇の劇音楽として1891年に作曲。全3幕からなり、各幕には前奏曲が置かれ、幕のタイトルが前奏曲にも付されている。《星たちの息子》は長尺ゆえに(《ヴェクサシオン》を除くサティ作品で一番長い)ほとんど演奏機会はなく、サティの生前に出版された「3つの前奏曲」のみがよく演奏される。

「ジュ・トゥ・ヴー」は、サティの代名詞とも言えるシャンソン(歌)。もともとは1900年に作曲したアンリ・パコリー作詞によるシャンソンで、現在はピアノ独奏版のほうがよく知られている。歌曲の中間部にトリオを加えた複合三部形式で、親しみやすいワルツとなっている。